

マルコ福音書の口頭性の再認識と釈義¹

藤田 宏 紀

21世紀に生きる我々が、マルコ福音書を読もうとする時、あるいはさらに研究しようとする時、おそらくほとんどの場合には、「印刷された文字を黙読する」という形でそれを体験する。写本を問題にする場合も、それは基本的に読まれるモノである。

しかし、マルコ福音書がひとまとまりの作品として成立した時、それを黙読できる者はごく限られていた²。Richard L. Rohrbaugh³によれば、長年にわたって古典学者と新約学者たちは、「ローマ時代には読み書きが広く行き渡っていた」と想定する傾向があった。しかし、近年の研究は、読み書きや学校組織の範囲が、従来かなり過大評価されていたことを示している。例えば、William V. Harrisは、紀元1世紀のローマにおいて、識字率が10%を超えていたことはありそうにないとしている⁴。またRohrbaughは社会科学的な見地から、マルコ福音書が成立した農耕社会では、識字率は2-4%であったと見積もっている⁵。

そのような社会で、マルコ福音書がどのように用いられたのだろうか。写本の朗読、暗唱した語り部 (storyteller) による朗唱、あるいは暗唱した者による演じ語り (performance)、等々、推測はされているものの、確定することは難しい⁶。いずれにしても、写本を読むことができたのはその社会の中で (また信仰共同体の中でも) ごく少数の者であり、大多数の者はマルコ福音書を読むのではなく「聴く」、あるいは「見ながら聴く」という形で体験したことになる。

¹ 本論文は、日本基督教学会第45回東北支部学術大会で発表したものに加筆・修正を加えたものである。

² 本論文では、マルコ福音書の成立とその用いられ方を中心的な課題としているので、ギリシア語の著者と聴衆を前提としている。ギリシア語が、アラム語など他言語の中でどのように用いられていたかについては、以下を参照。土岐健治『イエス時代の言語状況』教文館、1979年；田川健三『書物としての新約聖書』勁草書房、1997年、199-350頁

³ Richard L. Rohrbaugh, *The Social Location of the Markan Audience*, *Interpretation* 47/4(1993) 上村静 訳「マルコの聴衆の社会的位置」『日本版インタープリティション』No.26 (1994) 83-114； Bruce J. Malina, Richard L. Rohrbaugh, *Social-Science Commentary on the Synoptic Gospels*, Fortress Press, 1993 大貫隆 監訳、加藤隆 訳『共観福音書の社会科学的注解』新教出版社、2001年、14頁

⁴ William V. Harris, *Ancient Literacy*, Harvard University Press, 1989

⁵ Rohrbaugh, 前掲論文、前掲書。

⁶ Philip Ruge-Jonesによれば、Network of Biblical Storytellers(NOBS)が活動しており、その中でDavid Rhoadsは"Performance Criticism"を提唱するに至っている("Omnipresent, not Omniscent: How literary interpretation confuses the storyteller's narrating", Elizabeth Struther Malbon (ed.), *Between Author and Audience in Mark: Narration, Characterization, Interpretation*, Phoenix Press, 2009, 29-43)

Walter J. Ong⁷をはじめとする研究は、文字のある文化 (literal culture) と、(文字のない) 口伝の文化 (oral culture) とでは、思考の形式そのものに大きな違いがあることを明らかにした。文字が発明され、一般的に用いられるようになることで、人間の思考形式は大きな変化を遂げた。それゆえに、文字と印刷に慣れている我々は、しばしば文字のない文化、一次的な口頭的文化 (primary oral culture) を理解し損なってしまう。

マルコ福音書は、口伝の文化から文字の文化への移行が進行しつつある、古代地中海世界で形作られた。マルコ福音書が、「文字に書き留められる」ことによってひとまとまりの作品として形成され完成されたとしても、その全体的構成は口伝の文化・思考様式に深く根ざしていると指摘する研究もある⁸。そうであれば、マルコ福音書を積義していく上で、その口頭性 (orality) を考慮することが必要と思われる。

本研究は、まず Ong の研究成果を簡潔にまとめ、次にそれに対する新約学者たちの応答を概観し、最後にマルコ福音書研究にもたらす意義について考察したい。

1. Ong の "Orality and Literacy"

Walter Jackson Ong はイエズス会士であり、専攻は古典学・英語学である。1982年に出版された彼の "Orality and Literacy: The Technologizing of the Word" は日本語訳 (1991年) をはじめとして既に数カ国語に訳されている。日本における影響はあまり大きいとは言えないが、英語圏での新約聖書学ではしばしば引用されるに至っている。彼はその中で、Orality と Literacy⁹ の心性 (mentality) の違いについて、主に通時的側面から研究している¹⁰。彼の専門である古典学に軸足を置きつつ、応用言語学、社会言語学、心理学、人類学、文学理論、メディア理論などを広く視野に収めた著作となっている。

⁷ Walter Jackson Ong, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, Methuen, 1982; Routledge, 2002 桜井直文 他訳『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991年。以下、訳語は基本的に邦訳書 (底本は1982年版) に従ったが、部分的に2002年度版からの私訳に換えてある。

⁸ 例えば、Joanna Dewey, *Oral Method of Structuring Narrative in Mark*, *Interpretation* 53(1989)32-44

⁹ orality 及び literacy を日本語訳するには困難が伴う。邦訳370頁「訳者あとがき」において、orality は「声の文化」「声としてのことば [の性格]」、literacy は「文字 [の] 文化」「[文字を] 読み書き [する] 能力」と訳した事情が述べられている。聖書学では oral tradition などの用語との関連から、「口伝性」ないしは「口承性」と訳した方がわかりやすいかもしれないが、Ong の概念的にはより広がりがあるように思われるので、とりあえず「口頭性」とした。また、literacy は今日、「与えられた材料から必要な情報を引き出し、活用する能力」という意味で「リテラシー」という表記が定着しつつあるが、本論文では手書きの文字を読み書きすることのみを問題としているので、「読み書き」「書くこと」などとした。

¹⁰ p. 2 (邦訳7頁)

以下に、"Orality and Literacy" の内容を、簡単にまとめておきたい。

言語は、口頭の現象であり、それは基本的に音の世界の中で話され、聞かれるものとして存在している。一方、書くことは、言葉を空間にとどめることである¹¹。

言語研究は、ここ数十年をのぞいて、口頭性よりは書かれたテキストに集中してきた。その理由は、研究するということそれ自体が、書くことと関係があるからである。さまざまな事実や、真偽に関わる言明を、抽象的に順序づけ、分類し、説明して分析することは、書いたり読んだりすることなしには不可能である¹²。

これに対して、一次的な声の文化のなかで生活する人々、つまり、どんなかたちであれ書くことにふれたことがない人々は、「研究」することをしない。むしろ見習い修行によってものを学ぶ。話し (speech) というのは、それがなされてしまえば、研究しようにも後には何一つ残さず消えてしまう。それゆえ「研究」するには、話の書き下ろされたテキストを利用するしかなかった¹³。

ミルマン・パリーは、1920~30年代における研究において、ホメロスの詩に特有なほとんど全ての特徴が、口頭で組み立てられる制作方法によって強いられるエコノミーによることを明らかにした。ホメロスは、紋切り型のテーマの周辺で、きまり文句 (formula) を繰り返し用いて詩を形作っていた。それは、(ホメロスのような) 詩人だけでなく、一次的な声の文化に属していた人々の思考世界の全体が、そうした決まり文句的な思考の組立に頼っていたからである。そのような文化においては、いったん獲得した知識は、忘れないように絶えず反復していかなくてはならない¹⁴。

のちにHavelockは、プラトンの時代までに、ギリシア人が書くことを自分の内に実効的に内面化 (interiorize) したことを明らかにした。知識をたくわえる新しい方法は、記憶術的な決まり文句の中ではなく、書かれたテキストの中にそれをたくわえる。書くことは思考に構造的な変化をもたらし、そのことがギリシア哲学の開始と緊密に結びついていた¹⁵。

こうした研究が、さらに人類学、メディア研究などに影響を与えつつある¹⁶。

一次的な口頭文化において、言葉は音である。言葉は事件であり、出来事である。言語は、

¹¹ p. 6-7 (邦訳22-25頁)

¹² p. 8 (邦訳26-27頁、ただし邦訳では冒頭の文が「ほとんどここ数十年、…書かれたテキストに注意を集中してきた」と訳されているが、これは「この数十年をのぞけば…」の誤りであろう。)

¹³ p. 8-10 (邦訳27-29頁)

¹⁴ p. 20-23 (邦訳49-56頁)

¹⁵ p. 23-27 (邦訳57-65頁)

¹⁶ p. 28-30 (邦訳67-69頁)

声という音に依存している現象である。音は、それが存在から出て行く時のみ存在する。音は本質的に消えゆくものである¹⁷。

一次的な声の文化に生きている人々は、ことばが偉大な力を持っていると考えている。音は、力を用いることなしにひびくことはできない。すべての音は、そして特に口頭での発話は、生体の内部から発するのであるから、「力動的 (dynamic)」なのである¹⁸。

一次的な声の文化において、ことばは音であり消えゆくものであるから、ことばを用いて思考することは、「記憶し、再現する」という仕方で行われる。記憶しやすいように、それは決まり文句を組み合わせ、リズムカルに形成される¹⁹。

声の文化に基づく思考と表現の特徴は、さらに以下の9つをあげることができる²⁰。

(1) 累加的 (additive) であり、従属的 (subordinative) ではない

例えば、創世記1:1-5のドゥエー版 (1610) とニュー・アメリカン・バイブル (1970) を比較すると、前者がヘブライ語のweやwaを単にandと訳しているのに対して、後者はand, when, then, thus, while と訳し分けている。一次的な声の文化がweやandによって累加的 additiveに話を進めるのに対して、書かれたものは分析的で推論的な従属関係の思考を発展させる。

(2) 累積的 (aggregative) であり、分析的 (analytic) ではない

声の文化に基づく思考と表現の構成要素は一並行的な語や句や節、対比的な語や句や節、形容句など一、より集まってひとまとまりになる傾向がある。「兵士」というよりは「勇敢な兵士」、「王女」というよりは「美しい王女」という表現を好む。このような表現は、現代でも例えば「人民の敵」「十月二十六日の栄えある革命」などの常套句に現れている。そのように形成された伝承表現は、ばらばらにされ、分析されることになじまない。

(3) 冗長 (redundant) ないし「多弁的 (copious)」

口頭の発話は、発せられるやいなや消えてしまう。それゆえ精神は、それまで論じてきた事柄から注意をそらさないようにしながら、いっそうゆっくりと前に進まなければならない。冗長な言い回し、つまり直前に言われたことのくりかえしは、話し手と聞き手の両方を、話の本筋からはずれないようにしっかりと引きとどめておく。声の文化においては、無駄のない筋が通った言い回しよりも、冗長な言い回しの方が自然である。

(4) 保守的ないし伝統主義的

声の文化において、知識は、得がたく貴重なものであり、専門に知識を保存している博識の

¹⁷ p. 31-32 (邦訳72-73頁)

¹⁸ p. 32 (邦訳74頁)

¹⁹ p. 33-36 (邦訳77-82頁)

²⁰ p.36-57 (邦訳82-124頁)

古老たちが、この社会では高く評価される。書かれたテキストが、保存の機能を引き受けることにより、精神は保存的任務から解放され、新たな思索に向かうことが可能になった。

もちろん、声の文化が、それ自身の創造性に欠けるわけではない。それは、物語る(narrative) 創造性である。物語る創造性は、新しい話の筋を考え出すことではなく、この時、この聴衆と、ある特別の交流をつくり出すということにこそある。

(5) 人間の生活世界への密着

書くことは、知識を、生きた経験から距離を置いて構造化する。そして、洗練された分析的なカテゴリーというものは、そうした書くことに依存している。しかし声の文化は、その全ての知識を、人間の生活世界(lifeworld)に多少とも密接に関係づけるような仕方で概念化し、言葉にしなければならない。

声の文化は、リストのような中立的な手段や、商売のためのハウ・トゥー・マニュアルにあたるようなものを持たない。

(6) 闘技的な(agonistic)なトーン

書くことは、抽象する力をはぐくみ、抽象は、人々が互いに格闘しているこの闘技場から知識を切り離す。それは、知る者(主体)を知られるもの(対象)から切り離す。それに対し声の文化は、知識を、人間の生活世界の中に埋め込まれたままにしておき、そうした知識を、人々がやり合う格闘のコンテキストの中に位置づける。ことばによるすべてのコミュニケーションが、直接に口頭での言葉でなされ、音声のやりとりの力学に巻き込まれざるをえないときには、人と人との関係はつねに高揚したものとなる。それは魅惑であり、そしてそれ以上に、敵対でもある。

知識の用いられ方ばかりでなく、物理的な行為の称賛という点でも、声の文化は、闘技的に仕組まれている。また、くどい称賛も特徴的である。善と悪、徳と悪徳、悪人と英雄というように、強く分極化し、格闘しあっている声の文化の世界には、そうした賛辞はつきものなのである。

(7) 感情移入的(empathetic)あるいは参加的(participatory)であり、客観的に距離をとるのではない

声の文化にとっては、学ぶとか知るということは、知られる対象との、密接で、感情移入的で、共有的な(communal)同一化を意味する。書くことは、知られる対象から知る主体を切り離し、そうすることによって、個人的に関与せず、距離を取るという意味での、「客観性」の条件を打ち立てる。

(8) 恒常性維持的(homeostatic)

声の文化の社会は、現在の中で生きている。それは、現在と関連がなくなった記憶をすてさることによって均衡状態あるいは恒常性を保っているところの現在である。声の文化に根ざし

た精神は、定義に無関心である。言葉はその意味を、それがつねに固着している現実の場所からのみ獲得する。それは、辞書のように、たんにほかの語からできているのではなく、同時に、身振り、声の抑揚、顔の表情、そして、実際に話される語がつねにそのなかで生じる全人間的、実存的な状況を含む。

現在との関連が直接認められないような過去の部分については、たんにかれらの記憶から消えてしまう。そのようにして、声の文化は、勝利者史観（triumphalism）を強める。

(9) 状況依存的（situational）であって、抽象的ではない

声の文化は、概念を、状況依存的で操作的な（operational）な準拠枠の中で用いる傾向がある。声の文化の中で生きる人々は、例えば幾何学的な図形、抽象的なカテゴリーによる分類、形式論理的な推論手続き、定義、また包括的な記述や、ことばによる自己分析などには不慣れである。これらの項目は、テキストによってかたちづけられた思考（text-formed thought）に由来する。

文字に慣れた人々は、口頭で組み立てられる思考が、文字的なパターンに従わないという理由で、それを素朴なものを見なしてきた。しかし、口頭による思考は、きわめて洗練されたものでありうるし、それ独自のしかたで反省的でさえありうる。

文字に基づく文化においては、逐語的な記憶形成（verbatim memorization）が、ふつうテキストをもとにして行われている。しかし、パリーらのホメロス研究が明らかにしたのは、韻律に合う決まり文句が古代ギリシアの叙事詩の構成を導いていたのであり、それらの決まり文句が話の筋や叙事詩のトーンを損なうことなく容易に入れ替えることができた、ということである。そして、現代ユーゴスラヴィアの口誦詩人についての研究は、同様のことが現代の口頭文化においても確認できることを示した。口頭的に逐語的伝達が行われる場合もあるが、それは儀礼的な言語化や、特殊な言語的制約、あるいは音楽的制約によって維持されている²¹。

声の文化に特有な記憶が効果的に機能するのは、それが「重い（heavy）」人物、つまり、記念碑的で、忘れがたい人物、だれもが知っているような公共性を帯びている人物を登場させるときである。したがって、声の文化に特有な認識のエコノミー（noetic economy）から生み出されるのは、なみはずれた人物像、すなわち、英雄的な人物像である。英雄的な人物像は、型どりの人物像（type figure）となりがちである²²。

音は、他の感覚に比べると、ものの内部に対して独特の関係を持つ。すなわち、あるものの物理的内部を内部として確かめるのに、音ほど直接的な感覚はない。人間の声は、声の共鳴を

²¹ p.57-67（邦訳124-148頁）

²² p.69-70（邦訳148-151頁）

与える人間のからだの内部から出てくる。見る時には、わたしは一方から他方へと目を動かさねばならない。しかし聞くときには、わたしは瞬時にあらゆる方向から音を同時に集める。つまり、わたしは自分の聴覚世界の中心にいる。その世界はわたしを取り囲み、わたしは、感覚と存在の一種の核の位置にいる。音は、このように統合する感覚である。視覚の典型的な理想が、明晰判明性、つまり分けて見ることであるのに対し、聴覚の理想は、ハーモニー、つまり一つにすること (a putting together) である。内部とか外部という概念は、人間存在に基礎を置く概念であり、人間の自分自身の身体の実験にもとづいている。身体は、わたし自身と他のあらゆるものの境界である。わたしはここに、つまり「内部」にいて、他のすべては「外部」にある。声の文化にとって、コスモスは、その中心にいる人間とともに生起しつつある出来事なのである。人間が世界について思いめぐらす時に、目の前にある何かを第一に考えるようになったのは、印刷と、それが可能にした地図を見る経験が普及した後のことなのである²³。

話されることばは、人々をかたく結ばれた集団にかたちづくる。話し手がある聴衆に向かう時、聴衆のメンバーは通常、彼らとそして話し手とも、一体となっている。口頭の言葉の内化する力は、人間存在の究極の関心である聖なるものに、ある特殊なしかたで結びついている。ほとんどの宗教において、話されることばは儀式や礼拝の生に必須のものとして機能している。たとえば、キリスト教においては、聖書は礼拝において高らかに読みあげられる。なぜなら、神は人間に「語りかける」方であり、人間に〔文字を〕書き送る方とは考えられていないからである²⁴。

書くことが、「コンテキストを持たない」言語、あるいは「それだけで独立した」話しと呼ばれるものを確立した。現実の話しと思考は、常に現実の人間同士のやりとり (give-and-take) のコンテキストの中に本質的に存在する。書かれたものは、その外にある²⁵。

書くことは、完全に人工的である。「自然に」書けるようになることはない。生理学的ないし精神医学的に話すことが損なわれていなければ、どんな文化の中どんな人間も話すことを覚える、という意味で、口頭の話は十分に自然なことである。しかし、書くことや書かれたものは、無意識から必然的にあらわれてくるものではない。話されることばを書かれたものに置きかえる過程は、意識的に適用される明言可能な規則によって支配されている。

書くことが人工的であるというのは、けなしているのではない。書くことは、他のどんな人工物にもまして、文句なく価値あることであり、実際、人間の潜在力を実現し、内化するのに欠くことができない。十分に生き、十分に理解するためには、近づくことだけではなく、離れ

²³ p.70-73 (邦訳151-156頁)

²⁴ p.73-74 (邦訳157-159頁)

²⁵ p.77-79 (邦訳166-169頁)

ることも必要である。離れることこそ、書くことが、他のどんなことにもまして、意識に与えることなのである²⁶。

声の文化が機能しているところでは、人々は過去を項目化された (itemized) 領域とは感じていない。過去は先祖たちの領域であり、現在の意識を更新するために振り返って、そこから教訓をくみとる源泉なのである。

書くことによって、表やリストを作ることが可能になる。一方で、一次的な声の文化においては、こうしたリストに当たるものは物語 (narrative) の中に置かれている²⁷。

物語は、他のどんな文化にもまして、一次的な声の文化の中でより広範な役割を果たしている。そこでは、知識が洗練された科学的抽象的カテゴリーによって整理されることがない。むしろ物語が、多くの知識を、比較的まとまりのある、持続性のあるかたちにつなげることができる。声の文化における物語のプロットは、われわれが典型的にプロットと思っているもの、例えば、クライマックスに向かって進む一筋のプロット (climatic linear plot) とは異なる。むしろ、主題の繰り返し、挿話的構造、フラッシュバックなどを特徴とする²⁸。

2. 新約学からの応答

Ongによる口頭性 (Orality) に関する知見に対して、新約学からの応答はWerner H. Kelberによる "The Oral and the Written Gospel" の出版に始まったと言っていいだろう²⁹。時を同じくして、Society of Biblical Literature にthe Bible in Ancient and Modern Media Group が作られ、広く議論されることになった³⁰。そのグループでの議論の成果は、Semeia の2つの論文集としてまとめられている³¹。

その中心人物の一人はJoanna Deweyである。彼女は、OngやKelberの提起を受けて、マルコ福音書全体の口頭性について検討している。Eric A. Havelock は、プラトンがミメーシスとして拒否したものの諸特徴—それらが出来事 (gignomena) から成っていること、出来事が視覚的に具体的であること (horata)、原因と結果によって組織化されず多くのこと (polla) から成つ

²⁶ p.80-81 (邦訳172-175頁)

²⁷ p.95-99 (邦訳199-209頁)

²⁸ p.136-148 (邦訳284-308頁)

²⁹ Werner H. Kelber, *The Oral and the Written Gospel: The Hermeneutics of Speaking and Writing in the Synoptic Tradition, Mark, Paul, and Q*, Indiana University Press, 1983; New introduction, 1997

³⁰ Joanna Dewey, *Textuality in an oral culture: A survey of the Pauline Traditions*, Semeia 65(1995)37-65

³¹ L. Silberman ed., *Orality, Aurality, and Biblical Narrative*, Semeia 39(1987); Joanna Dewey ed., *Orality and Textuality in Early Christian Literature*, Semeia 65(1995)

ていること一を明らかにしている³²。Deweyはその特徴がマルコ福音書全体に当てはまることを検証し、マルコによる福音書が全体として口承的な仕方で構成されたと論じている³³。

また彼女は、自ら編集した *Semeia 65* の中の論文で³⁴、主に William V. Harris³⁵ の研究に依拠しながら、一世紀の古代地中海世界において読み書きの広がりが限られていたことを詳述している。当時読み書きができたのは、帝国の政治的・社会的エリート、その官吏たち、軍人、書記をする奴隷、国際取引をする商人、医者、技術者、調査員、そして吟遊詩人であった。そのような人たちは、法律などの帝国支配の領域、及び長距離の取引に加えて、文学作品や個人的手紙などにも「書くこと」を用いた。しかし、その他の人々にとっては、日常生活で「書くこと」はほとんど必要とされなかった。人生上の特別な出来事（遺言、結婚、離婚）や、経済的契約に「書くこと」が用いられていた証拠があるけれども、その時には書く技術を持っている人に頼めばよかった。ユダヤ人も、確かに祭司長たち、長老たち、ファリサイ派の者たちなどは読み書きができたであろうが、それ以外の者たちに読み書きが広がっていたことはほとんど無かったであろう。多くのユダヤ人たちは、神殿と結びついた公の宗教的語り部を通して聖書に親しんでいた。公的なコミュニケーションは公的な宣言者によって口頭で行われた。その他にも、読み書きしない者たちに知識を広める上では、様々な形の語り部たちが影響力を持っていた。そして研究の後半では、パウロ自身の宣教においても、読み書きが必ずしも中心的な事柄ではなかったことを明らかにされている。

さらに彼女は、マルコ福音書の物語批評における先駆的な著作である、“Mark as Story” の第2版に著者として加わっている³⁶。その序言では、「その十数年間の研究によって新約聖書が oral culture の中で成立したことが明らかにされつつあるが、第2版では oral hearing よりも literary reading に焦点を絞った」ことが述べられている。

³² Eric A. Havelock, *Preface to Plato*, Belknap of Harvard University, 1963, 村岡晋一 訳『プラトン序説』、新書館、1997年

³³ Joanna Dewey, *Oral Method of Structuring Narrative in Mark*, *Interpretation* 53 (1989) 32-44

³⁴ Dewey, 前掲論文。

³⁵ William V. Harris, 前掲書。

³⁶ David M. Rhoads, Donald Michie, *Mark as Story: An Introduction to the Narrative of a Gospel*, Fortress Press, 1982 ; David M. Rhoads, Joanna Dewey, Donald Michie, *Mark as Story: An Introduction to the Narrative of a Gospel*, 2nd ed., Fortress Press, 1999

3. マルコ福音書の口頭性と釈義

3.1 方法論に対する示唆

さて、このような口頭性 (Orality) についての知見は、マルコ福音書の釈義に、いかなる影響を与えるであろうか。

3.1.1 物語批判と口頭性

物語批判 (Narrative Criticism) を行う場合、テキストの中に構成された「内的作者 (implicit author)」と「内的読者 (implicit reader)」を想定する³⁷。これは、書かれたテキストを個人が「読む」というセッティングを前提としている。

しかし、マルコ福音書が口頭での語りを目指して構成されたのであれば、物語批判の枠組みでは口頭性の持つ特徴を十分に理解し得ない。一次的な口頭性の文化において、受け手は個人というよりは聴衆である。Ongが指摘したように、聴衆は、「われわれ」として互いに同一化し、また語り手あるいはperformerともしばしば同一化する。そうであれば、その状況を理解するには先に挙げた二つの構成概念ではなく、むしろ「内的作者 (implicit author)」、「内的語り手ないしは演者 (implicit storyteller or performer)」、「内的聴衆 (implicit audience)」の三者関係として捉えることが必要であろう。ここで特に注意したいのは、storyteller またはperformerがaudienceの前に常に現前しているということ³⁸、そしてaudienceは集団 (の中の個人) として想定されるということである。

さらに、以下のようにも言えるだろう。口頭文化に生きている者が、口頭のセッティングで福音書が物語られ、演じられる場合に、そこでの出来事は「過去」としての距離を容易に失って、「今、ここで (here and now)」に生起している事柄として体験されうる³⁹。

3.1.2 視覚性と聴覚性

inclusioは、口頭的な構成においてしばしば用いられる技法であるが、用語としては「囲う」という視覚的な感覚に基づいている。聴覚的なモードに焦点を合わせるならば、むしろ共鳴 (echo) という用語がふさわしい⁴⁰。

³⁷ Mark Allan Powell, *What Is Narrative Criticism?*, Fortress Press, 1990; 太田修司「文学批評—物語批評と読者反応批評を中心に」木幡藤子・青野太潮編『現代聖書講座 第2巻 聖書学の方法と諸問題』日本基督教団出版局、1996年、233-250頁

³⁸ Philip Ruge-Jones, 前掲論文

³⁹ Rhoads, D., Dewey, J., Michie, D., 前掲書 p.4-5.

⁴⁰ 例えば、Dewey 前掲論文; Joanna Dewey, "Mark as Interwoven Tapestry: Forecasts and Echoes for a Listening Audience, *THE CATHOLIC BIBLICAL QUARTERY* 53, 1991, 221-236

3.1.3 「釈義」行為と口頭性

より根本的な問題は、Ongが指摘しているように、研究すること自体が書くことと関係しているということである。研究することは、対象を離れて批判的、分析的に見ることを伴う。釈義という行為も、基本的に批判的、分析的な作業である。一方、マルコ福音書は聞かれ、体験され、聴衆にある種の統合をもたらすことを期待している。

釈義が、テキストから距離を取り、分析するという方向だけにとどまるならば、文字的な先入観のゆえに口頭性を誤解するということになるだろう。釈義が解釈への指向性を有している限り、誤りの可能性が排除できなくても、聴衆との同一化に想像力を広げていくことが、マルコ福音書の有していた力動をよりよく理解することになるだろう。

3.1.4 本文批判と口頭性

また、口頭性を再認識する時に、本文批評の意義は相対的に低下すると言えよう。なぜなら、本文批評は書き下ろされた最初のテキストの復元を目指すものであるが、口頭的作品はより柔軟なものであるからである。

たとえば、以下で検討するマルコ1:1-15の中では、特に1:1「神の子」が本文批評上、特に問題のある箇所である。1:1が現代の我々がイメージする「表題」であるとするれば、そこに「神の子」の句があるか無いかは、福音書全体の理解を方向付けるうえで根本的に重要なことになってくる。しかし後述するように、1:1節がそのような意味での「表題」であるとは考えにくい。さらに、その句が最初の書き下ろされたテキストにはなかったとしても⁴¹、「マルコ」本人が再演を繰り返していくうちに「神の子」を付け加えるようになったという可能性も排除できない。その場合、古い方がoriginalであると判断され、そのようなものとして尊重されるべきであろうか。

しかしそのような考え方自体が、我々の「書かれた作品は完成されたものであり、逐語的に違うことなく伝達されねばならない」という思いこみに由来しているのではないだろうか。口頭性優位の社会では、そのような逐語的正確さへの要求は高くなかった。Deweyは以下のように述べている。「読み書きは、明らかに口頭のコミュニケーションに仕えているように思われる」、「これらのテキストは口頭性の援助として始まったのであり、それ自身にはおそらくほとんど重要性をもっていなかった」⁴²。

このようにしてみると、最初期のキリスト者にとってはテキストの逐語的な正確さの持つ価

⁴¹ 田川健三『書物としての新約聖書』勁草書房、1997年、472-481頁；A. Y. Collins, Mark: A Commentary, Fortress Press, 2007, p.130

⁴² Dewey, 前掲論文(1995) p.51.

値は、後の時代の者たちよりは相対的に低かったと考えて良い。そうであれば、我々にあっても、本文批評に過度に負荷をかけた積義と解釈をすることは、テキスト成立の意図に沿わないということになるだろう。

3.2 マルコ 1 : 1 – 15 の再検討

以上のような考察をふまえて、マルコ1:1-15について再検討してみよう。なお以下においては、煩雑さを避けるため、「内的作者」「内的語り手ないし演者」「内的聴衆」を、単に「作者」「語り手」「聴衆」と表記することにする⁴³。

1 節

マルコ福音書をひとまとまりの「語り」として聴く時、1節が作品全体の主題を前もって概念として提示しているとは考えにくい⁴⁴。むしろ語り始める糸口であって、作者と話者と聴衆の間に、最初の接点を造り出す。それは、聴衆が既に何らかの形で伝え聞き、現在その流れの内にある「キリストの福音」であって、その「初め」がどうであったのか、聴衆は語り手とともに過去の時へと入っていくように招かれる。

2 節

2節は *kathōs gegraphtai* で始まる。「イエス・キリストの福音」は、イザヤの預言書に既に書かれてしまっていた通りに起こったことなのである。

「あなたより先に」(新共同訳)は *pro prosōpou sou* であり、「あなたの面前に」と訳しうる⁴⁵。またイザヤ書の一部として引用されている言葉は、「見よ (*idou*)」で始まり、「あなたの前に」「あなたの (*sou*) 道を」という二人称単数に向けられている。語り手が「あなた」と語る時、その言葉は聴衆にとってまず自分を指しているものとして体験されたであろう。聴衆は、自分の「面前に」、使者が派遣されて来るのを見る。その使者は、聴衆の「道」を準備する⁴⁶。

3 節

「荒れ野」は、イスラエルの民にとって、試練と準備の場所である⁴⁷。そこを通り抜けて、初

⁴³ ここで言う「語り手」とは、物語批評における Narrator とは異なる。聴衆の前で *storytelling* または *performance* を行う話者を意味する。

⁴⁴ Ong 前掲書p.123 (邦訳259頁)。「レットルを思わせるタイトルのようなものは、声の文化ではたいして役に立たない」。

⁴⁵ 佐藤研 訳『(新約聖書 I) マルコによる福音書 マタイによる福音書』岩波書店、1995年、3頁

⁴⁶ ここで聴衆自身の道と受け取られる「あなたの道」は、7節以降で少し違って響く。ここでは「あなた」がイエスを指す響きが強まる。しかし、ここで聴衆が「あなた」を自分を指すと感ずること

めて約束の地にはいることができる。

「整え (etoimasate)」「まっすぐにせよ (eutheias poeite)」と呼びかけられているのは、「あなた方」(二人称複数)である。語り手は聴衆に、集団として直接に呼びかける。その時、「主」はまずYHWHなる神を指す呼び名として響くであろう。聴衆自身が、YHWHなる神が来られる道を、整えるように呼びかけられる。

4 節

そして預言されていた通りに(2節)、ことは起こる (egeneto)。洗礼者ヨハネが登場する。聴衆の面前に遣わされた使いが、洗礼者ヨハネである。彼が宣傳伝えたのは、「罪の赦しとなる回心の洗礼」である。

5 節

「ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆」、ヨハネの宣教に応じて、洗礼を受ける。聴衆は既にここで語り手に呼びかけられ、「皆 (pasa)」に同一化して、「罪を告白し」「洗礼を受ける」ように招かれる。それが「主の道を整える」ことなのである。

6 節

ここに描かれているヨハネの姿は、エリヤ(王下1:8)を思い起こさせる。

7～8 節

ヨハネは「わたしよりも優れた方が、後から来られる」と語る。ヨハネが「使者」であり、後から来るのが「主」であるという期待が高められる。ヨハネは水で洗礼を受けたが、その方は聖霊で洗礼を受ける。その方の働きはヨハネに比べて決定的に優れているだろう。

9 節

そしてその通りに、それらの日々にはことは「起こった (egeneto)」。すなわち、イエスが来たということで実現した。イエスは2節で語られていた「主」であり、YHWHなる神と共鳴している。

イエスはヨルダン川でヨハネから洗礼を受ける。「ヨルダン川」もまた、約束の地に入る前に渡らなければならない場所である⁴⁸。イエスがヨルダン川を通過して登場する。そこが約束の場所である。

は、「間違い」ではない。聴覚はいくつもの音が共鳴することを許す。「どちらかが正しく、どちらかが間違いで、正しい方に修正されねばならない」というわけではない。むしろここでマルコが、意図的に曖昧で多義的に響くように、2節をイザヤ書に接続させている可能性がある。分析的に見れば、2節と3節は指示対象において矛盾し、不明確であるということになるが、口頭の体験はむしろその多義性を許容し、包む。

⁴⁷ Rhoads, M., Dewey, J., Michie, D. 前掲書 p.69

⁴⁸ Rhoads, D., Dewey, J., Michie, D. 前掲書 p.69

10節

語りによって、「天が裂け」「霊が鳩のように降って来る」のを、聴衆は見る。イエスに霊が降ってきた光景が、聴衆の「今」と共鳴する。

11節

天から響く声、すなわち神の声は、イエスを「子」として認証する。聴衆はその声を聞く。

12-13節

そしてすぐに、霊はイエスを荒れ野に送り出す。荒れ野は、ヨハネが現れた場所であり、イスラエルが誘惑と試練にあった場所である。霊がイエスを荒れ野に送り出すことは、イエスが「神の子」と認証されることが、必然的に苦難と試練の中に送り出されることになることと予示している。イエスはイスラエルと同じく「四十」の間誘惑を受けるが、霊が彼の内にいるので、無事にそこを通り抜け、約束の場所に至る。

14-15節

ヨハネが退場して、書かれてしまっていた通りに、時が満ちる。神の支配が近づいてしまっている。それが1節で予告されていたところの「イエス・キリストの福音」であり「神の福音」なのである。

聴衆は語り手を通してイエスに語りかけられ、その呼びかけに応じて、「皆」（5節）と同じように「悔い改める」こと、そして告げ知らされた「福音」の「中で(en)」「信じる」ように招かれる。

結論

新約文書は、口頭的文化に文字的文化が浸透していく過程の中で成立した。文字を書くことは、内面化されることにより、人の思考のしかたを大きく変化させた。

マルコ福音書もまた、この過程の中で成立したものであり、その痕跡を残している。口頭性を考慮することは、我々を文字的な思い込みから守り、積義の方法論に適切な修正を要請する。口頭性の持つ集団的、統合的、体験的な方向性は、文字性と積義の持つ距離の取り方や分析的方向性と根本的な葛藤をはらんでいるが、その両者を考慮していくことが、マルコ福音書の力動的な解釈に手がかりを与えるだろう。

Recognition of the Orality of the Gospel of Mark and Its Exegesis

Hiroki FUJITA

In the 21st century, when we read or study the Gospel of Mark, most of us read it silently as printed text, but when the Gospel of Mark was originally composed, only a limited amount of people probably no more than 5 percent were literate. The Gospel of Mark was not experienced through “reading text”, but by means of “hearing the proclamation or the performance” of its truth. These things considered we would do well to do exegesis of Mark's Gospel with its beginnings in orality in mind.

1. Walter J. Ong, “Orality and Literacy”.

In Ong's “Orality and Literacy” published in 1982, Ong shows that a primary oral culture is different from a literate culture in regard to the individual methods of thinking. We primarily use script and printed matter, so we often misunderstand the oral culture.

2. Responses from New Testament studies.

In the area of New Testament studies, Werner H. Kelber's “The Oral and the Written Gospel” a 1983 publication responded to Ong's works. In the same year “Bible in Ancient and Modern Media Group” was created in the Society of Biblical Literature. In 1989 Joanna Dewey argued that the Gospel of Mark as a whole was composed via the oral method.

3. The Orality of Mark and Its Exegesis.

3.1 Some suggestions for methodology.

3.1.1 Narrative criticism assumes the concept of an “implicit author” and an “implicit reader”; however, considering the orality of Mark, one should modify these concepts. Instead of “implicit author”, “implicit storyteller or performer” can be emphasized. Instead of a “reader”, an “implicit audience” can be more central. The audience is not an individual, but a person in a group. When the gospel is narrated in an oral culture, the events in a story are easily experienced by the audience as if it were happening in the here and now.

3.1.2 The term of “inclusio” should be referred to “echo” in an oral setting.

3.1.3 The purpose of Mark is to be heard, to be experienced and to be applied by the audience. There appears a fundamental conflict between the text's exegesis and the experiencing of its truth.

3.1.4 The value of a text critic may become relatively lower in the oral setting.

3.2 Reflection on Mark 1:1-15.

I applied modified narrative criticism to Mark 1:1-15. Hearing the “gospel”, the audience may experience the presence of “the Kingdom of God” and the request for repentance and belief.

Conclusion

In order to understand the New Testament writings, we should explore the dynamics between orality and literacy. Mark's Gospel especially has features of oral composition. Applying modified orality concepts to discussions of interpretation will help clarify our understanding of Mark.